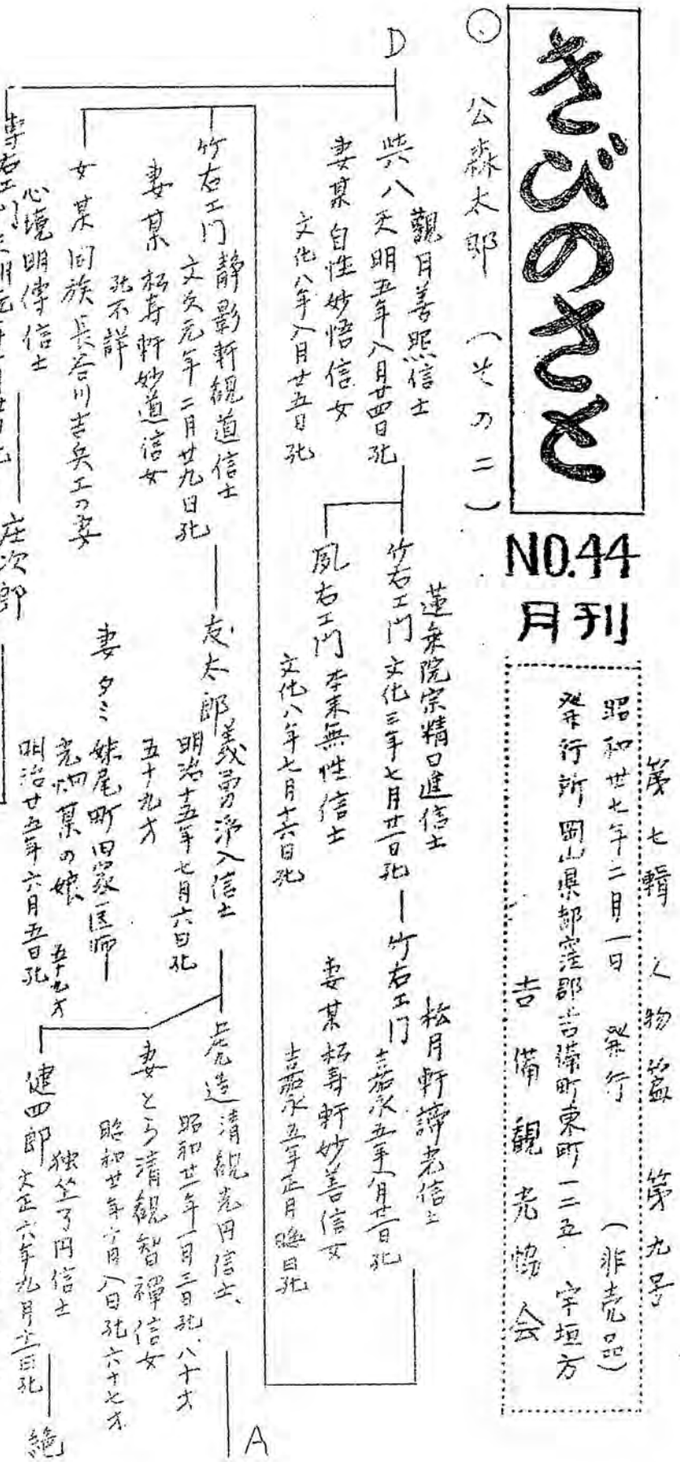
きびのさと
NO.44
月刊
昭和廿七年二月一日　発行　（非売品）
発行所　岡山県都窪郡昔備町東町一三五　宇垣方
吉備観光協会

第九号

第七輯　人物篇

○公森太郎（その二）



○

佐藤佐登女

佐登女は藩政の末期、撫川に住んでいた貧しい水呑み百姓の娘である。両親の名は傳つていないが、佐登女は三人兄弟にして、兄は幼にして夭した。父は常に健康にすぐれず、この世を去り、母むかりそめの病で没した。文は常に佐登女は家計を助けてよく働き、病父に仕へて文字通り赤貧のうちに孝養を尽し、幼い弟を養育し、その日々を送つていた。この孝養は世間の評判となり、ついに領主戸川侯の上聞に達し過分の褒賞を賜つたという。いま佐藤氏の住居も定かでないが、弟は長じて岡山の大供あたりに移住し、その跡を継ぎ、佐登女は縁があつて今保の遠藤金次郎というものの妻となつて女二人をもうけた。姉の方は昭和廿九年に七十三歳で死去した。妹を静野といい、妹尾あたりの浦田寄平に嫁ぎ、一子を生んだ名を馨という。

封建時代には父母に孝養をつくし、領主から顕彰せられ、褒美を賜つた例は全国的にして孝子傳として文献にみる所である。一例をあげると、いまの石川県奥能登地方は明治五年の廃藩置県の際、七尾県として年余り続いたが、その当時の公文書に「其方儀幼年より心掛宜敷両親の差図に背かず……孝養おこたり無く寡婦の身を以て貞操を守り家事を勵み……依而金七百疋を贈り候事」七尾県」としるされている。一疋は二十五文にしていまの二十五銭に当り、終戦後の金に換算すると五万円あまりになる。

敵が戦後、全く国民の思想は一変して家族制度はすたれ、孝子など表彰するどころか、父子との間に常に生活上の醜い争いが起つている現状は考へさせるものがある。将来社会問題として反省せねばならない事柄ではなかろうか。

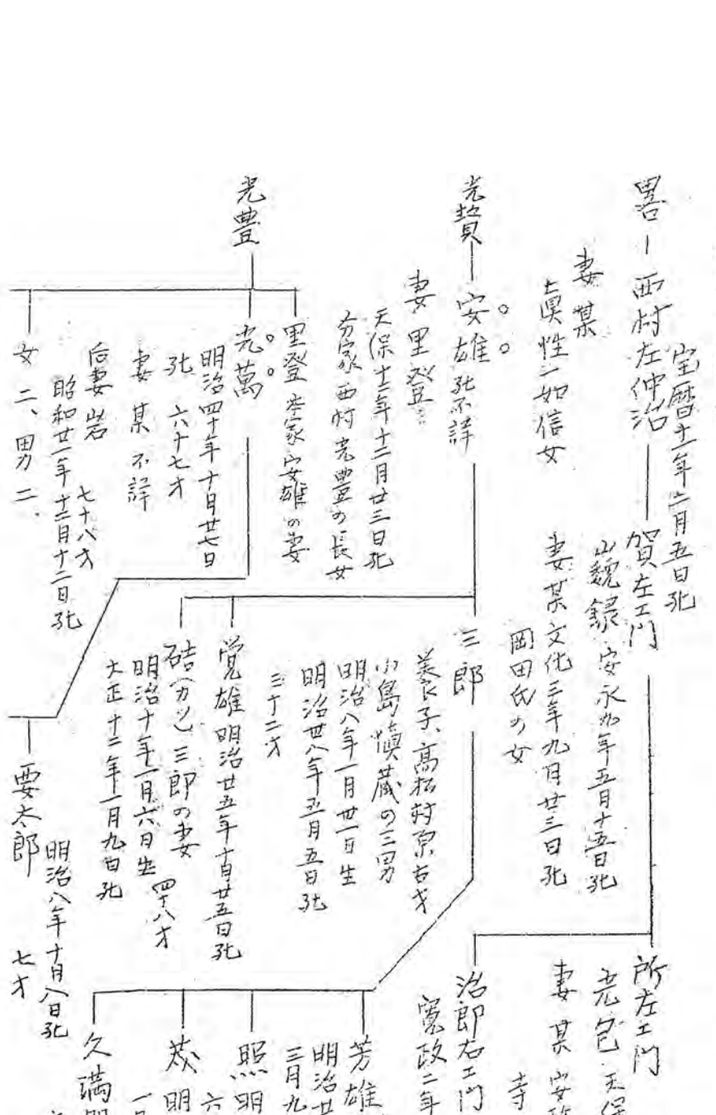
○

西村光豊

通称を繁宇という。光豊はその諱である。西村家は代々庭瀬藩主板倉氏に仕へた家臣にして、文化十二年に西村所右衛門光邑の二男として庭瀬藩邸内に生れた。十六歳で始めて仕官し、二十七歳の時に分家して一家を興した。転々奉じて一藩の留学者として経海（天下を治める）に志した。最も易理に精通し多くの門弟を教授した。

室は吉備津宮の神宮を勤仕する藤井氏の出にして、名を千代女といいその間に男四、女三をもうけた。家督を光萬に譲り学問に専念した。偶明治の変動期に際しては平素研学する所の漢典に則り、毫も去就にまどわず流俗にも溺れることなく、よくその志を貫徹した。繁幸は弧の前日に自ら起つことの出来ないことを知り、家人に後事を託し、明治十九年の十月十二日と十二歳の天寿を全うして寝るが如く静かに不帰の旅へ赴いた。屍は松林禅寺精舎の先堂の域に埋葬したのである。

西村氏略系



○

吉田太良兵衛

太良兵衛は宝暦の頃の人にして屋号を吉田屋といい、その先祖は元禄十二年板倉氏が庭瀬に移封の際従して町屋敷（いまの本町）に住し、代々御用商人を勤め封建時代から続いて弐百六十余年間商業を営んだ商家である。

昭和三十四年五月廿五日座敷改造の際、床の間を取壊した所、長さ五十六糎、幅十二糎、厚さ五糎の敷居の内側に

「宝暦十庚辰年春夏　吉田屋　太良兵衛七十七歳、孫兵衛代記之　千秋万歳子孫繁栄

本家座敷一部普請仕候改料　大工　当所　新兵衛作之」

と書いてあるものを発見した。これによって考へれば二部改造が宝暦（一七六〇）であるから恐らく六十余年をさかのぼる元禄時代以前に新築された建物と思はれ、その家格を知る上に貴重な資料でもある。

吉田氏歴代の墳墓は松林寺内に十数基ある。そのうちの

釈然了脱信士（宝峯慧祖信女）　明和二乙酉十二月二日　吉田太良兵衛墓

（経常了典信士）　延享三丙寅五月十四日　同性女

（墳嶽恵林信女）　寛政二庚戌五月廿五日　後妻吉田孫兵衛墓

天保三壬辰年正月朔日　（過去帳に孫兵衛の妻、市崎村多田氏の娘、俗名まつ、とあり）

増吉 大正十一年一月十二日歿 好田刀 明治廿三年生
男 五、女 一、
喜代子 岡山市住網浜、
繁四郎 姫路に住す
仁 （明治二年板倉家侍帳に御徒士三両三歩一人扶持、西村安雄とあり。また同帳に外様給人取扱御近習給人並十二石三人扶持西村次エ門（光萬か）とあり）。

の二基がこの父子の墓石にしく、過去帳に孫兵衛は四十二歳で没して
いるので宝暦十年は十二歳の時である。父太良兵衛は八十二歳で他界
していることになる。親子の年令があまり隔たり過ぎるがわからない。

略系

略―吉田屋某―源五郎（延享三年九月十一日死）―太良兵衛（享保九年十二月廿日死）―孫兵衛（寛政三年五月廿五日死 四十三才）―平右衛門（明和三年十二月二日死 七十三才 天保九年二月三日死）

○

澤田鶴育

通稱は多治右衛門、名は朝久、鶴育はその號である。庭瀬藩士澤田六郎兵衛幹歓の子として寛政十二年某月庭瀬邸内に生れた。文化、文政の頃に選ばれて藩の政を掌り、よく敏腕を振い当時困窮せる藩財の整理に努めたことはあまりにも有名な話である。又能筆家としても知られ即代持筒五十石二人扶持を食んでいた。晩年は家督を養嗣に譲り隠居して筆硯に餘生を楽んだ。明治五年八月四日、七十三歳で長逝した。嗣は松山藩士三浦義方の次男金吾にして朝喬と改めた。しかし不幸にして嘉永七年七月六日、廿四歳で病死したので同じ松山藩士の田結退山の次男を養うて跡目相続とし名を龍雄といった。大正十一年八月廿八日八十四歳で逝去した。その子を鎮夫という。父に似て長生し昭和十四年十二月六日八十歳で没したのである。

澤田氏の旧屋敷は大手を入って右に曲った突当りの塀端に面した處にある。いま子孫は東京に移住している。邸宅の跡は新しく民家が建てられているが、西北隅に昔の土蔵が荒れはてたまゝ、残っており、稲

荷宮の一小祠とその傍に口径七十五糎ばかりの大甕がある。往時の水溜甕である。澤田氏の祖は知る由もないが、墓碑に妙法是則院善要　元文元年十月朔日と銘があるのが最も古く、また元禄、享保の板倉家侍帳に澤田姓が載っていない。或は享保以後に庭瀬藩に勤仕した家柄であろう。累代の墳墓と位牌は日蓮宗本門院にある。

略系

澤田

祖―多治右衛門―六郎兵衛（宝暦八年二月五日死）
是則院善要　元文元年十月廿日死
善徳院覚心居士
妻　善貞院妙心大姉　安永五年二月十三日死

朝久
多治右衛門　号鶴育
実相院孝徳日昭居士　明治五年八月四日死　七十三才
妻　貞如院妙飲日唱霊　文久二年八月十一日死　五十九才

朝喬
諱八金吾
松山藩士三浦平太義方の次男
慈眼院誠清日視居士　嘉永七年七月六日死　三十四才
高　常唱院法遠日光居士　明治廿五年四月一日死　四十三才
松、智月院妙覚日浄大姉　文久二年十月廿九日死　二十六才（龍雄の妻女）
多喜　深信院妙遠日春大姉　嘉永三年三月廿日死　二十六才
（沢田多喜三郎の妻）
某女　妙雅童女　天保四年九月十六日夭死

朝欽
多治右衛門
心浄院了閑居士　享和三年六月九日死
妻　某　心清院妙閑大姉　天明三年五月十日死
浄勇信士　天明八年　二才死
慈国信士　寛政六年　二才死
一乗院妙有大姉　文化六年　二才死
多年治（父二治）　短零魂覚　文政九年四月廿七日死

幹欽
六郎兵衛
時正院宗貞日欽居士　文政五年正月九日死
妻　某　貞操院妙唱日琮大姉　嘉永二年八月十二日死　七十五才

A

敬蔵、貞蔵

龍雄

松山藩士田結五左門退山の次男、高徳院龍象日敏居士、天保十年八月八日生、文正十一年八月廿日死、八十四才

后室類　備后尾道熊谷氏の娘、三十才

慶孝院妙徳日親大姉　明治三年十一月朔日死

后室　多喜加　西阿知村宮田

桂五千の姉、始め茅野という

瓔纓院妙勝日輝大姉　弘化元年四月十四日生、明治十三年六月廿五日死、三十六才

后室　加都　總社、福屋七郎丁の姉、天保十年十月十五日生、明治廿八年四月六日死、六十七才

元明院妙徳日章大姉

朝岡、母は加都

鎮夫　万延元年五月二日生――秀夫　在東京

昭和十四年十二月六日死、八十才

巧妙院穆徳日等大姉

妻　松代　備后尾道熊谷寿太郎の次女、

巧知院妙禎日操大姉　昭和二十年十月九日死

智要孩子　安政五年五月廿四日夭死

某　時法妙貞童女　明治廿五年一月三日死、五才

次津　慶應三年十月晦日生

千賀　明治三年十月八日生

珪今

○　高塚常吉

常吉は安政元年三月四日、名東県那賀郡高見島浜村八いまり香川県）の田中喜八の二男に生れ、明治の初年に庭瀬に来り、同八年五月、庭瀬藩の揉漆の商である高塚典吉の家督を継ぎ、嫁のヤスと結婚した。

廢藩后この地は花莚業が盛んにして着眼

当時幼稚な手織機を操作しているのに着眼し、製莚機の研究に志し、明治廿一年十月に多年苦心の結果、能率的な一人織の製莚機を發明して業界に貢献した。其後益々不備の点に改良を加へて漸く完成し、同廿六年六月には特許を受けた。

之れから引き続いて製莚に関するあらゆる研究は忽ちにして、八種類にも及ぶ附属機械を發明し、つづいて特許権を獲得した。時の岡山県知事並に各種関係団体から其功績を表彰

七

せられ、多くの褒状、賞金を授與せられた。

其後製莚機は常吉の創案した製作機械を基礎にして多年に亘り、種々改良せられて精巧なものに発達したものである。その草分は云ふまでもないことであり、今日製莚業者が受ける恩恵は誠に深く、その功績は偉大なものといわなければならない。晩年にはこの庭瀬の地を去って満州の大連市播磨町に住んでいる子息を頼って渡満し、大正十一年九月十六日、享年六十九歳で冥府の人となり、大連市の大連寺に埋葬した。

常吉に二男三女があり、長男を馬太郎という。常吉が四十一歳の時死亡し、長女の志賀も亦六年後にこの世を去り、妻ヤスは明治廿九年常吉が五十三歳の時に死没するなど不幸が続いた。次男忠雄がまだ幼少であったので、志賀の妹のトメに津山の出身の津田源一というものを養子に迎へたのである。この源一は明治四十二年頃に高木要蔵、織島品造等の地方有力者と相謀り、田中智学、山川智應、本多日生、高山樗牛、小笠原長生等の日蓮学者や文士、軍人などの同志が主唱する日蓮宗教義振興に共鳴して国柱会を組織し、本町五百五十九番地へ教会所を興して大いに伸導に努力した。これは日蓮上人が立教開宗の始めに「念佛無間　禪天魔　真言亡国　律国賊　法華経独り成仏ノ法ナリ」の格言に由来して、日蓮上人を国家主義者に仰いだのである。

源一は間もなく大志を抱いて大連へ渡り義弟の忠雄もそのあとを追ふて渡満した。三女のまさの」は岡山市七日市渡辺荒雨に嫁いだので家庭は無人となり、常吉は寂しい生活を送っていたが、明治の末期六十歳の頃に源一を頼って庭瀬を去ったのである。

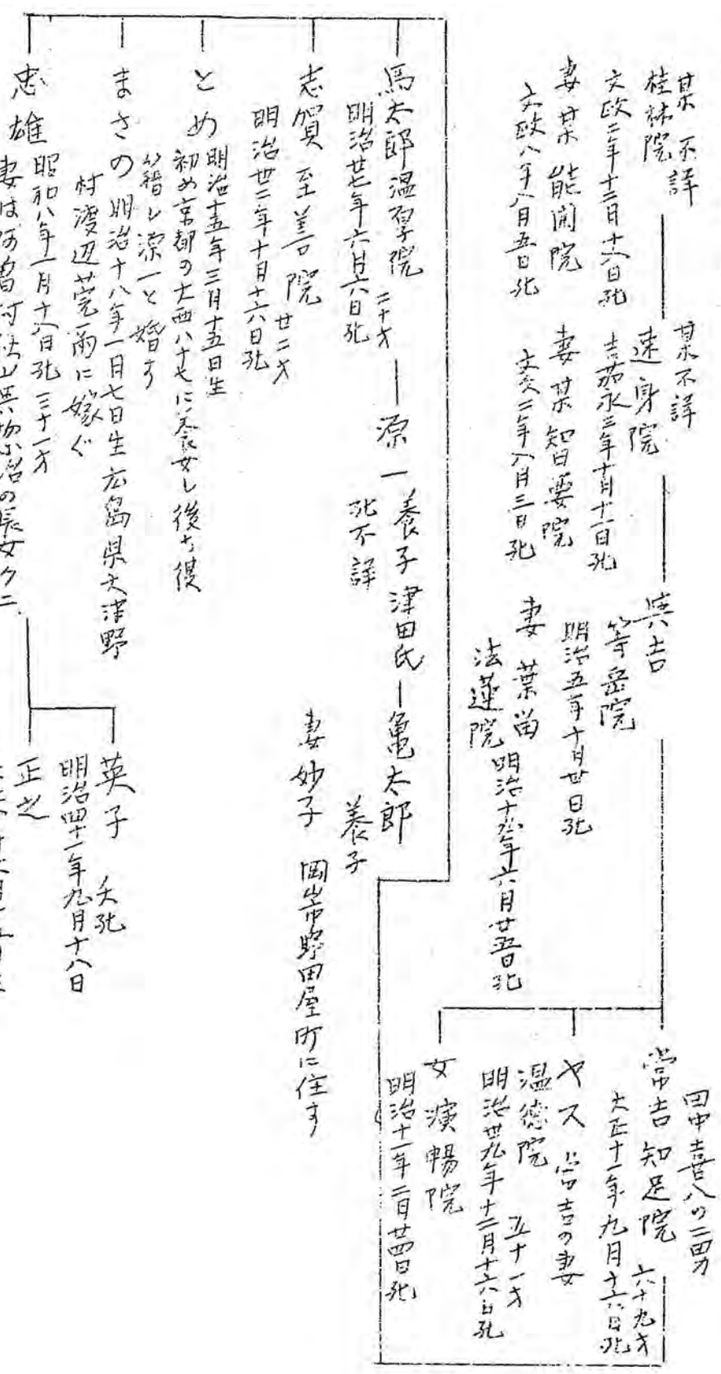
高塚氏の屋敷はもと郡内にあったが、廢藩後本町五百七十二番地（八

八

まの水谷氏の屋敷に移り、大工の棟梁として多くの弟子を抱え繁き蓄へていたが、家業を廢してその後同町五百三十二番地（いまの高橋良平）に新築移轉して旅館業を経営する目的であつたが、身寄り少なく、意を決して渡満するに及んで家屋全部を売拂つたという。

庭瀬には塩飽群島出身の大工が多い。これは常吉の全盛時代頼つて來遊したことに始まるのである。

高塚氏略系



○ 森安石象翁

名は石蔵といい、明治十三年七月十二日東花屋の豊でない百姓の森安藤三郎の伜として産ぶ聲をあげた。幼少の頃岡山市野殿の出明丈平という町の絵かきが端午の節句に村へきて幟に武者絵を描いているのを見て心を引かれ、父に乞うて画家になろうとしたが、許されなかつたので家出し、野殿の出明氏のもとに走つて弟子になつた。居ること数年、後ち恵藤雲到画伯に師事して熱心に学んだ。両親は石蔵の意志を容れ二十一歳の明治三十三年の春、京都へのぼり巌島虹石画伯の門に入り画道に精通した。間もなく画伯が病死したので歴史画の大家といわれる谷口石橋画伯に師事して益々その技を研いた。故郷にある両親は年老いて農業に従事していたが相続いでこの世を去つたので、石蔵は家屋田畑を金にかえ、京都に滞つて画壇にその名をなした。

田宅はその後朽壊したので取毀ち、石象は故あつて京都から大正二年頃野殿へ帰り、等を如雲と稱し一時岡山へ移り、間十年頃に石象と改め再び野殿へ戻り、生涯を絵道に楽み、昭和廿七年十二月七日七十三歳で逝去した。遺体は茶毘に附して御里花屋の立跡寺背後にある先塋の墓域に葬つたのである。

雑誌 書籍 文房具
黒部文堂
吉備町庭瀬
電二一九番
商標登録
醤油 ごま 撫川
葉原仙太郎商店
電171番

（おわり）この項未完